

松栢園七部系

隨筆

四



松杞園隨筆



嘗窺朱樹翁平生隨筆
 與余恣恣四方向所見聞
 者吻合者甚多其吻合
 者譬之如劍合延津珠
 還合浦近與大蘓五道
 謀欲鍍之于梓以公于

世_上清_二之_一于_ラ翁_二、點頭_一曰善哉_一是實_二可_レ謂_レ我_レ徒_レ之_一大_レ幸_一者也

曙_上算_一 秋_上學_一手

姑射_二嶧_一の_レ東_一小_一一_レ朱_一樹_一の_レ影_一あり
象_一ともか_レ離_一れ_レ親_一多_一を_レ志_一き_一ふ
や_一ふ_一お_レの_レる_一き_一を_レ日_一々_一新_一く
子_一を_レみ_一ふ_一其_一木_一落_一を_レ志_一き_一ふ
あ_一る_一さ_一象_一き_一ふ_一阿_一る_一お_レ翁_一
一_レ巻_一を_レあ_一る_一予_一ふ_一志_一き_一ふ_一
あ_一ふ_一云_一る_一き_一ふ_一新_一く_一比_一白_一古_一人_一也

儼潛小安之入るあゝ満しきを
あり家ひとを秘蔵せむも
ほひあくあほえさ子このく

大正禊

目次

去来書

藤堂家之文

緑筠軒

蘓東坡

幽齋文字讀之事

游女高雄文

天下老和上之事

楳月之事

附句之事

蕉翁消息 素名本當寺御會之事

俳諧式

附懷帝之事

落柿舍覺書抄

附哉手尔遠波之事

芭蕉翁偈

花下飲之事

蕉翁消息

蕉翁龜子良才之事

二見形文臺記

土芳隨聞抄

稻妻之句論

附支考夜話

蕉翁珍夕ノ消息

丈艸法師截断指頭之詩

伊勢法樂之句

三聖之事

脇二編并文

高野登山端書

菊句奈良難波之事

萬菊丸斲之圖

伊賀上野ヲ出テ旅行七十里之事

丈艸法師潘川ノ消息

枇杷園隨筆

○去来曰蕉翁の俳諧を學びし孫と云ふ
先師在世の集其の爲弟達の集をよく見
たりといふふへしそのも或ハ不審の句も多
かふへし其の不審の句をとも捨てて其の
志はさしやいおのひ孫ふ句をとるにけりて學子
あふへし或は先師眼前の俳諧といへどもその

辭あり支句のなる所一記めのふらひしす
猿蓑集ふも先師みんふかろふなるふ二
信ふしちふらげらふ信ふし其後の
集ふもさるかめれ句多なるへし第一唯今
見れふ人への眼よ及らぬ句よよこ多かへし
志のるぬを其不審の句よたあつて今も希れ
所借を考ふる人何少らやうの人先師の在
示を文へぬ人よも終る上達ししを文へしは

志く後人ふらるる事し文のる少た先師目
前の所借或ハ高第を達の俳諧貴しと不助を
の流もちちみ字ひれらおのつらと達し
後ふ不審とおのひるる句も其の事しと文へ
右ハ去來正筆みて先年大津騷道より少
来る古筆いらくの中ふらふ少

○芭蕉公病中の吟多るを括弧をかけた
と出捨らん後誰を追つてをた疾足めり

剝正凡の杖をうしうんは杖ののち
いうんはうくや

ひも道を入の通ぬ杖中哉雅堂又
右藤去也の語とては御の奈門乃
かきううん

○緑筠軒

可使食無肉不可使居無竹無肉令人
瘦無竹令人俗人瘦尚可肥俗士不可

醫傷人笑此言似高還似癡欲對此
君仍大嚼世間那有揚州鶴

元祐二年

超郡蘓氏

十四日書

○尚曰そまこの文字をみまかすこまや
たあまなううんやうんや

各りまうんたあまなうんやうんや
起るうんたあまなうんやうんや
光院殿さううんやうんや

るのうに豊後殿への時の技合の事いふ事あり
仰しきくちう中にも古今の序の事いふ事あり
ののちうとていふ事ありかたしとて半か
ふとて又さうやとていふ事ありかたしとて半か
おもしろい方たふたう連句の事いふ事あり
とていふ事ありかたしとて半か

許六曰菰句をいふ凡体を宗とていふ事あり
やういふ所をいふ作る事ありかたしとて半か

いふかげいふ人の感す依事をする事あり

○いふ事ありいふ事ありいふ事ありいふ事あり

せういふ事あり

右游女高様うきうき

○古語

天竺先和尚の老僧とて今も月訪事あり
ののち南池の鯉魚東野の馬以西舟
林乃一足鶏椿木おわらう

まゝのやうなあつたところのふゆの梅

かつく芭蕉翁の自画賛を又見るおのほ
けきくおて薄お梅も少く存入支るふてを

○大葉をよめる螢虫の目見東都那

月お裡の四民をかかけた

自作の口くひ又感んや

雲霧をく包める流の流るる

せいのまといおとよみおふまゝ

かゝれくおはまゝ多くおんや

あゝおれ

芭蕉翁の評ち少東海道の一助をよ
見する人風物の道におんくおんく
うらぬおんおんおんおんおん

○坂本ま〜一宿早苗お鹿を追ふ声ち
か〜覚えおし坂本平の流いつきの秋よ
存る平〜おんおんおんおんおん

し柳も昔は望しはく世やうしこの
下向の尻葉名の本當寺徳の會よ
此心をきつて告るは淡々少
張理巴負つて鹿やまゝの篠の隈
坂本を心の底ふ柔つら

執田會よ

ひら少書をつらぬ州女庵の西
二町より西ふ砦のゆめ申る少

きまらぬあめおふ書り付て進し

七月十八日

芭蕉

右千那尚白青鴉よちり少ぬふ文

芭蕉の歌真蹟知多野雀より少

○抑俳諧の連歌の式をよみまきて平甚
の式を建てる事とる所なるさよはくは既に
伏木田守武美の句と草子ありて千句は
連歌のつは式をよみて我徒の千句と

歌仙といふは三十九句を法し歌よ千
句の花三十六章早うれをぬや又千句の月を
討えく七中二候と辨は是より百韻の
中を一つおめとくおのつうし叶

千句懐帝

三十六枚

百韻懐帝

四枚

歌仙懐帝

二枚

本懐帝三折小懐帝四折ち少本懐帝

綴やもろぬ引を女結ひゆしてみつを上
たひへし七文字もそつとぬ所をこひよ
かく

發句の事

○愛を和歌をもちぬるめのかゝ必切字
可敷し

世を旅よ代かく小田のけり度ち

あうくしと白ハつまらぬも秋の風

事ふらふ集く夫阿ふらあ句かな

發句附句安ホ換之事

發句あふ代の宝ふ少いもの執を引く
あふし心の歌ふなる能ふあかたふれ
あふ風流を忘るへく次附合ハ執を引
へくへく巻をささくへし己よくても他の
附句あかかんあは是連席の恥な少俗徒ハ
あし片言を吟味をへし變化を事と

んほへー

○月花の事

前句ふ泥むるかへ風流を君もさへ
あ後を具合てひへかめやへんへし

右落極合言實書抄

○吹たふくは哉とふ事何少揺さく那
の頼る少具えをさの尾あゆとてゆせあ
や鳥の尾あふくてもよかへんれへしと

ひらめくふつけて刃の自在を出来ぬの
と支人む仰しきし空那う

俚諧の發句の上ふはさぬかやそきふく多き

○芭蕉翁偈

胡蝶窗前午影空蒲團眠覺歩
溪東花塢艸底總飛盡黃鳥一
聲深樹中

右富春山和尚話

○辰巳某の家の様の本よて家来彦六と
いふもの張ももつしう其後年一花下
飲小會をも人酔狂喧院の沙汰ふ及ひるしハ
白梵庵馬おといふる是をゆみそく

彦六も花もつしうもつしうその張

かくいひく吊ひききハ其後を喧院のさうか
たふくゆわくやとそある人ハうきくつれを教

○早まき佛頂和尚馬状をきくを公愚庵へ

為持此哉微細孰後侍更木兔の角何
々々き先感心侍々病床より病と起る後負
越此何々々い終子大眼悟哲の勢い驚入
車及和尚の肝傷い傷々志々探々ま々有
二重言評判下進て和尚も焦獵と寒々
ぬ歌くト友持病とく流々々く忍々庵まで
手をいひ終て一夕侍入大道の咄々止め
能諧ま々く至半夜

梅極み〜も悔〜や雪み花を

少〜所もし人感心致事〜し且又心秀乃三お
さ〜くおとらき入定て所ち〜か少い〜めと
甘心作麻衣美々方心秀へかき〜霞除筆い
右芭蕉翁真蹟松兄子何少

○亀子之良寸是華系神童子直予り
附勺禁止之事やか尤あき起る何〜は〜終り
生涯五十年ち々々天余私よ〜かりて〜少

越中前司盛俊塚 河原太郎兄弟塚

良将楠塚 能因法師塚

峠 六ツ 琴引 臍峠

野路小佛峠 檜尾峠 クラカリ峠

當麻崑屋

阪 七ツ 粧坂 西河上ちい坂

くはが坂 宇野坂 かがり坂 不動坂 生田野坂

山峯六ツ 國見山 安禅嶽

高野山 てつうの峰 勝尾寺の山

金龍の山

此外橋の敷川の敷名よきぬ山と書

付よりの〜ヤル

卯月ナミ 万葉 枕青

おしと孫

右真跡伊賀上野猪来よび少

○淋〜さよき〜人のま〜あまれ

十年日數三百日百の秋より一日を損し一夜の
樂を一夜のころこひ月小行を極くふかざるも
ゆるもよき世の中につらさ付くころ静におのつら
けりきすく那し只三子六百の日數をかせ
はらへる世中迅速の觀中おおひて何を
さるも人志し只一念動ゆる凡俗の情の
をさるもゆるもいよこ宗因ときり世にたらし
ふ因らるるの悪白ゆし只善惡のまめを
いよこ病魔仙狐の障をさるかふて死を
かきて止事ありし

右芭蕉翁真跡徐英より

○新模二見形文臺記

夫倭歌之文臺之製作者載明月記
勸善記等所誹諧之製度中絶而世
有識者鮮矣獨松永貞徳先生興之
而傳諸土佐國燕石子石子奇芭蕉翁才

授之翁終命一名匠新造之畫以二見
浦圖世云之二見形文臺也先師晉子
其角老人為蕉門顏閔授之而祕于庫
底有年偶憐予與學業傳之予亦思往
師之恩不敢為人許也而揚馬深嗜風雅
厚耽我道誠可謂一時之李杜頃造文臺
一固乞記諸予々惟古邑蕉詠郭公之一句
安其短冊於文臺之裡蓋是安短冊於文臺

裡之起原也今用其故事皆揚馬得芭蕉
翁杜宇之句之真蹟則安其德嗟呼道
之弘宇宙也皆自蕉翁採例諸芭叟者
誰為不然之乎聊述其始末以備于後之
證云尔

享保十八歲

夏五月下浣日

半時庵

○土芳曰師の思ふ節小我々をいつまきん

しつゝ私さふ師の道をもて其門をゆるる
みしつゝ私の道なり事ある門人なく已を
押さざるをたふさふ松のこゝろ松をさし
舟のこゝろ行よるしつゝ師の辞ありしも
私さふをたふさふ事ありし世より
しつゝ私を己の徳とせしつゝ終りなき
那しつゝ私をたふさふ其微の歌をて情
感をもたふさふ所ありしつゝしつゝあり

ふさふ出ても其つゝのより自然よゆ情
何しつゝ私をたふさふ我をこゝろ私成る其情
海よりさしつゝ私さふのたふさふ也
心をわらわら探さふ其つゝ香我心のほし
たふさふて移るたふさふ詮義をさしつゝ私
意ありし詮義我穿鑿責るもの暫も私さふ
放さるゝ道ありしつゝ私をたふさふ
是を専用の事なりしつゝ名を地持しつゝ

夙友の中此名自ら功者小病何れ師の
辭も能階の三尺の童子もせよ初ん
の句に持たのりくまき度いひ出く禮
しも皆功者の病を示されち又氣を
卷ふと殺せしむる何れ氣志を殺せハ
句に入つて先師も能階の氣子のせてす
るしとあや又我ををき悔しく句を
志す教しくしよいし皆氣をすかして

まのふの教ちし門人功者小は獨りて唯
句せん私ををきく分別門ふ口を閉す
あるも子臥る外何れの思ふも所之多年
能階好き人し外能を達しき人
ちやく能階ふも師いへるし何れ能書
もも見えきし師曰學事ハある何れ序
條て文甚也我問ハ髪を今ハ思ふ事
速よきもくまよいきるも迷ふ念ハ

文臺引お詠を則及古きしきひ
示さぬ、辞も何少

右古方随聞抄

稻妻や椽よて来たる帰る波

いろ妻やくさけてぬる入夏

門人曰此句古今の名句といふ

いへぬ答曰いへぬん

稻妻や雲のさけり五位の巻

我凡流をかく我はなりといふ

のいふひもなりと

右斗入夜信

いふは流をかく我はなりといふ

大あゆいもの事よそ其うちお何とやむ

あつしもた事のなるともたぬ少

○支考三年を強くもて取庵に仕候

せし時あつしひもたぬ久し句をさす

かゝるものもあはれなる人よ
支考の思ふ
句もよき年の秋

牛呵る畜るよ 鴨のうらやふしう那

この句は、とてうかひな程の事とかの
返りもよき及ひぬを久しうと後予が
此の句もよきとて

とて見せしハ有花は垣根の那

支考のその時腹下も汗るる程とて或人

得るは縁とて

右斗入夜活

○越人とも状ありて一辰の事

思ひしやふしもとて愛句もよき

思ひしやふしもとて愛句もよき

とて思ひしやふしもとて

思ひ句

不性なや抱起るるまの雨

又あゝめし門人のうま

庭園

梅の香や砂利爰流す谷の寒

今おのふ所は聊けいへんをせしむる

二月廿二日

芭蕉

孫夕松

右真蹟三河都築和樂より少

○甲子仲秋五烏訛自截断指頭

截断指頭大阿劔俦低端的勢還

瞞血流染出秋林色咲做空擧紅

葉看

石丈草真蹟大山岡田氏より少

○貞享子むとせぬ月の末伊勢より少

湯前の去を踏りて交る度はおよ

侍ぬさうら年のひらも老ひあふ

かゝるおほひひらもあふとも思

中へ終ふらん地へかの西川のかへ
くさくさしんみえ海の流れもなう
く終らるるも一た砂はまららか
ぬしん

何の木の花よりらぬむらう

右管亭夜話

○夫凡流よんをとめて其面赤子おとるか
めの濱の真砂のちかきぬ詠るるあま情を

述て其ものをあそむる人あつて其茶
の聖ち少と終らる文明の流其道さうん
ちあや一聖も此の茶との扱と少
て其更なる事今の人乃とさむか
うあへしと終らる凡雅の流れの天地と
とあやしんみえ海の流れもなう
く終らるるも一た砂はまららか
ぬしん

拙より白を流しつゝ道にぬゝる事
たゞむかへんは松の葉のこゝ

月花のうねりや実孔ある一蓬

右身池夜話

○おゝや兩戸よさらぬ秋の夜
雪芝

放つてあふ居ぬさく虫
たまご紙

荒くくあつ海は野分の那
猿雉

鶯のかしらをあたる栗の種
たまご紙

くめくおゝの會は望し得るまじ中のか家
くお移すのひきあつくの能借散るの白の
あゝく迷惑いきくは中綴りくく
く目あつた

○高野のおゝあのをきく雪は傷さるゝは
法の燈消す時なく坊舎地をくめて佛閣
覺をたつて一印頓成のまゝの花をく寂實
の雲のうゝふおしておほえ猿の声鳥孔

嗚呼子も腸を破るべからざる侍廟を
志し子もさうみ骨出たのあつたふりて情お
めおやうあつた愛とおるくの人孔といふ
集まきふ所よりてつ先祖の松岳髪をさうめ
きこいねたつていひきかたつたの白骨をほひお
こもたぬといふあつたつて寝をせぬといふさう
りもつたあつた海をさうめ

父母の志こつたお悲し雉の鳴り

右秋擧夜話

○一あ吟感心拙者逗留の肉をほひ助ええ
かひせぬ元存し愛こつて驚くといふ十
三次前句より秀逸といふこつた感心せし
其外恥をいふあつたあつたあつたあつた
不少いあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

る不仕の

九白南都をくもるるを

と氣を物くくたふらんと難波曾白秋

秋の夜

秋の夜を打崩しとる此の那

秋の暮

この道をゆく今とる秋の暮

井のる

たを成也

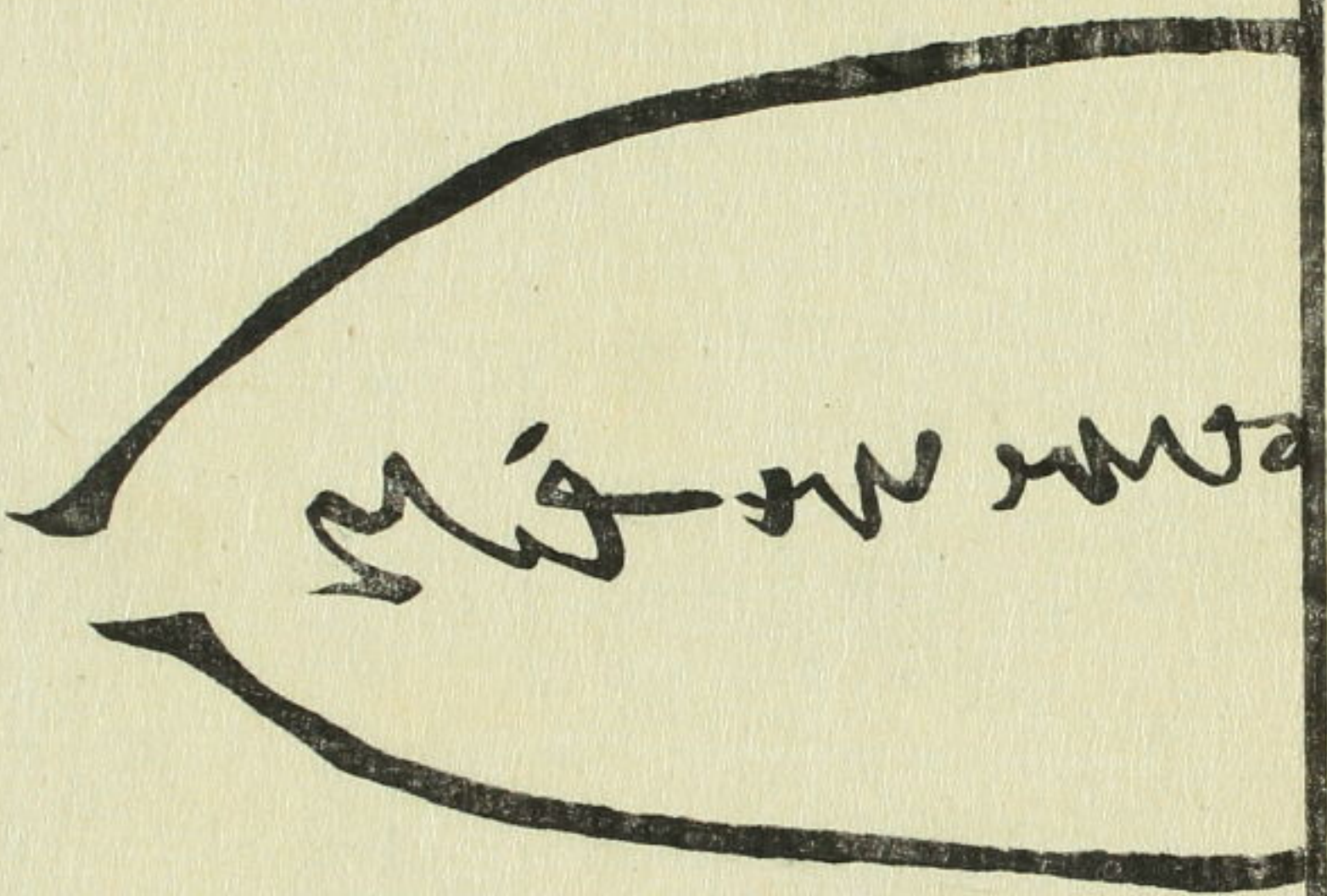
まじりての極

た芳極

五子樹木之圖

芭蕉翁真蹟
五子樹木之圖

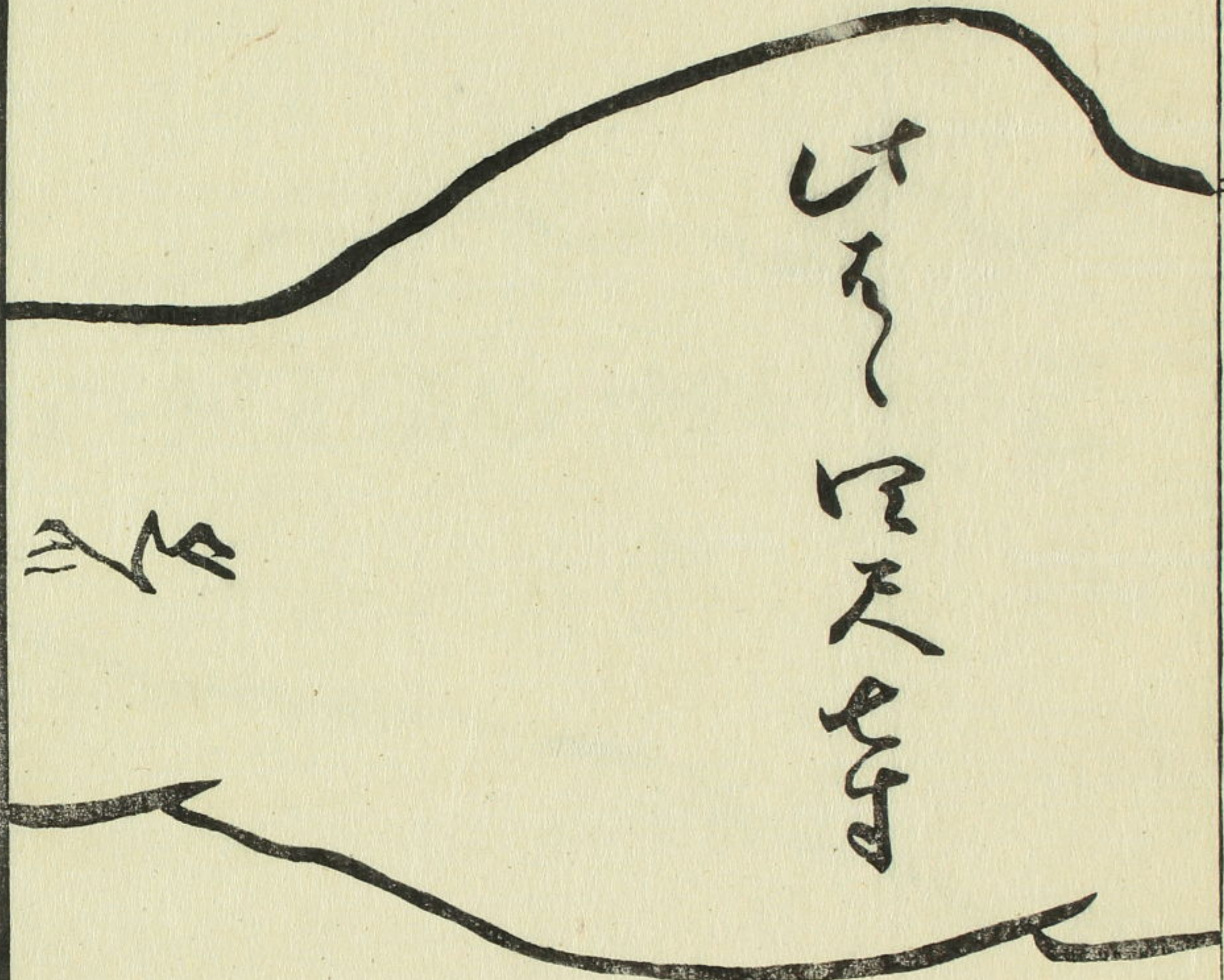
是にちて用ひ
あつるや



あつるや

いそ

あ



伊賀上野
内神屋三四郎所藏

○二月十九日伊賀上野をめぐり三ヶ四日道の程
百三十里内船十二里駕籠四十里歩行路七
十里雨も逢ふ事十四日

瀧の數 七ツ 龍門 西河 蜻蛉

蟬 布留 布引 箕面

古塚 十三 兼好塚 歌塚

乙女塚 忠度塚 清盛石塔 敦盛塚

人丸塚 松風村雨塚 通盛塚

庵をくぐり冬山の山嵐吹く深山乃
いふの夕ぐれを古くく人ハ来てもとらえ
と古裡の西の山麓の兼好にうた筆の
すゝいふかゝるこゝ草臥る淋しきあ
まゝのこゝかと思ふおのころくそくをち
かくしては文をくくめよおまうくも能く後
より能くおのころ記里云おのころ少誠ののぶ
友といひく古も今もかりぬぬぬるこゝろ

くち返ししはをよめくそヤカに女隣人の
所作とは志のちぬくそらよめおまの
は後をぬれ先く打つまゝ寢てくちやし
せよよめは白髪よめは流しめはあめのいふこ
悦力多作よめは宿所は無きよめは
さゝめくおくはあめのあしみる信よめ
病気の責付くも火燵の樽よめは風情
なうう手療治のよめは知てくふうまの

持るゝもよきを隣の州の戸に
まゝぬゝゝゝ天目の痕く打あ
るゝゝゝ千石正秀九郎大
ひゝゝゝめやしゝゝゝゝゝ
何ぞとゝゝゝゝゝゝゝゝ
ヤおゝゝ其作ゝゝ極をゝ魚とゝの
極の一字ゝゝゝ極珠ゝ極月ゝゝ
ゝゝ年波ゝ極ゝゝゝゝゝゝ

放下僧の法句とて嘆ふゝの端と
歳旦のゝあゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝ終ゝゝゝゝゝゝゝ我
月を頼ゝゝゝゝゝゝゝ年
くゝ増ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

清由〜〜みま〜〜お〜〜も〜〜ら〜〜く〜〜は〜〜あ〜
つら玉子の〜〜ま〜〜お〜〜あ〜〜ら〜〜ら〜〜い〜〜い〜
は〜〜際〜〜と〜〜程〜〜感〜〜入〜〜幸〜〜頃〜〜口〜〜去〜〜来〜〜方〜〜と〜
長〜〜海〜〜卯〜〜七〜〜集〜〜を〜〜え〜〜ま〜〜に〜〜付〜〜思〜〜句〜〜う〜〜と〜遣〜
序〜〜不〜〜其〜〜角〜〜の〜〜あ〜〜白〜〜野〜〜徑〜〜の〜〜う〜〜と〜し〜
虫〜〜舟〜〜集〜〜中〜〜か〜〜ら〜〜か〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜
褒〜〜美〜〜悦〜〜入〜〜と〜〜神〜〜と〜〜世〜〜上〜〜切〜〜物〜〜の〜〜業〜〜談〜〜句〜
浮〜〜山〜〜小〜〜舟〜〜〜〜と〜〜い〜〜の〜〜は〜〜い〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜

さ〜〜い〜〜ら〜〜く〜〜賞〜〜え〜〜は〜〜是〜〜を〜〜先〜〜白〜〜お〜〜顔〜〜の〜〜や〜〜ら〜
は〜〜ら〜〜や〜〜と〜〜い〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜
は〜〜ら〜〜や〜〜と〜〜い〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜
と〜〜存〜〜し〜〜と〜〜い〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜
と〜〜の〜〜ま〜〜え〜〜お〜〜わ〜〜く〜〜ら〜〜千〜〜石〜〜う〜〜く〜〜ち〜〜り〜〜け〜〜の〜〜あ〜〜い〜
ふ〜〜て〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜
た〜〜と〜〜誠〜〜と〜〜ぬ〜〜と〜〜の〜〜お〜〜ほ〜〜め〜〜お〜〜な〜〜つ〜〜う〜〜と〜〜の〜〜い〜
腹〜〜ら〜〜ま〜〜ち〜〜や〜〜し〜〜頃〜〜は〜〜も〜〜西〜〜國〜〜を〜〜し〜〜ら〜〜折〜〜節〜

中へさるくのみやまへも肥後能奉
使帆と申し僧を助成寺の住持今度蕉
翁の墓をうつま月並具はちしよる
は寺をむらう大磯の虎西國順程の砌
助成のこめして此をよめて墳をつき十郎の
笛うしおの進致しき家との事由緒は
たしく八百八駄程をこし是らそよて
さても蕉翁の徳光年くは墓のゆきも

實は崇く賞えし事し彼寺月並の儀式
をせしや誠くも例の不佳病をけ
し断やきしお句一ツ石碑の前よ手向と
いう句し白くちき句

ちし世の寂をそのまのちおの石
頃々又

雪の吹よるおつりや鷹の歌
清くもくおつりよしおんやしあき

とては同しとらうと好つて無さるる
心は田ひひ出さふさうせとかく
とめ女所は物とて雨の夜雪の
そはくは後とて何とて
いふと後とて存は
たふと平とて
たふと平とて
腹をふして
たふと平とて

答騷人起予

強催文飲草堂中侵我秋山睡味
濃若是有情休再訪枝踈老樹不
啗風
守るは身見
やう老木の枝
ちやと我

閏八月望夜月下書懷

桂轂推雲輾嶺頭
草廬有約待吟遊
山深若見獨看月
爭識年光加仲秋

喜洛柿舍去來風士到山房

遠吟落葉到茅衡
柴火當燈道話清
一味幽情偕欲賞
寒天霹靂震三更

閑自携花^を出^で遊^ぶ
^の心^を^と^り
^て ^中 ^に ^散 ^ら ^す
雷^を ^聞 ^く
^心 ^を ^何 ^に ^し

去來見^し ^来 ^る ^身 ^を ^近 ^に ^見 ^る
夜^も ^亦 ^半 ^に ^志 ^を ^中 ^に ^せ ^る
事^い ^ふ ^事 ^を ^待 ^つ ^心 ^を ^存 ^え ^る
先^月 ^に ^お ^き ^け ^た ^事 ^は ^今 ^も ^一 ^篇 ^と ^な ^り ^て ^あ ^ら ^ま ^る
乃^も ^心 ^を ^し ^ら ^べ ^る ^貴 ^女 ^を ^あ ^ら ^ま ^る

冥^に ^お ^も ^か ^お ^の ^心 ^を ^上

去來う換授け方とを尋ふよと茶ををりし
長崎の唐人のうらぶらぶのきりく甲斐巾
影をこのくく壁のうらうらあまの浦岡のま
をいやくねよ火燧ををるのめいけいふ
おのの詩ををいひやくの随かた
やも又おののみの通の海男よと居るの
まい何やくのさしやくやく風流
をいひやくのいひやくのいひやくの

いやくのいやくのいやくのいやくの
傾城ふらうらうらと其角のよと大なるの
自月よの笑ひし石部金吉のいやくの
雪の煮湯のいやくのいやくのいやくの
いやくのいやくの極のいやくのいやくの
いやくのいやくのいやくのいやくの
いやくのいやくのいやくのいやくの

謝贈毛穎

久無興味動吟情
咲肘睡猫爐火傷

雪鎖栢窗氷鎖硯友又贈筆促回章

筆の跡を返して雪の庵

是夕祈願所法印もさくしつゝも立
侍旅者へ見舞ふし夫行者しつゝを免
の小角の飯を流して歸さる所書ふ
るも山伏の口よりよも立歸きく都の寺ま
くも見るとあつし所し輪袈裟小大目玉の
くも(かみ)の富士見しつゝは(か)のや

貝吹いかにあはは内丸のこころを
あつらひてあつらひて種もよは方の文は後の後
上もまかして安堵の体とておうい

伴曰大燈國師の歌よ

あねおし法報意もたつて身うけし筆
ぬきかゝる入道し三身の佛を一吞ま
かるしよめぬし

松波集しあつらひてあつらひても燈其を

聞しつるふ見あつしる故かちよふつこ
異類異形に集あ来のこころ船か元
くそよのこころもく其角方へ肉強くそ發
句尺そてく體のこもく入のさうく船かん
や作者のん名他の上鬼案よ及く事し
されとも

譯曰小栗の判官兼氏の筆力
を安あす新ふ彼照もの姫のこおと

寺家文をくくのこく入いかに
此文を道よ拾りてあつて
おころあまのさうく事
さうあつて女房達よあつて
くまへいあつてあつてあつて
おまあ路のさうく事
あつてあつてあつてあつて
と在原のおまあつてあつて

支考近頃美濃のお山の夕〜
帰や〜又来〜筆紙〜
林原の里よりすくふ矢橋船お〜
らむ笑よ〜のひり〜

ち〜又その何〜三吉千石
善七九郎を流志賀の又助〜
いつ〜か〜た〜
吟長〜皆〜赤い〜
伝〜

屋中し

正秀中〜勤〜酔〜
頃々西々尾花川よ〜
手〜足〜
つ〜火燵〜酔〜
せ〜い〜其〜
よ〜し〜
よ〜想〜
今〜足〜

とく集う古扇をいひもみ見せ
此曉まじし見し涙夢おほひ
そひの書いひよ

池の軒の煙のこぼる

夢想く酔く持ぬ

おのゝと男四軒屋の留まらぬ
か感入る言今も
見ぬ外も張ふ木の葉の籠女は

見え門裡ていかに山路を歩坊
淋くまのそあ合南隣は後家娘三人
あふもし小伝寐の枕引く草菴
嵐も初梅百ちの千いよを
ういぬお屋く食つふも
野猫の書いひつかき来く雪の
雀をきて少狐の手かけをけり子
とまあはあやあつたを素門隣

竈をかゝる茶のし所にかゝるみおのりも
新傳のふ本家の日陰冬も淋しく夏は
何れもかゝるは合ふし立寄茶のめい
ちやと今朝うら三つ入す明てもめい入ふ
あゝぬ庄を東門夫婦もむいふたふもせ
やしとてはたしつていふもさうやん
ゆる咽ふいそ何れも入すをかゝぬけ
かほし將軍息つてさゝるをえ鼻は櫓を

上ヶ足打しく雨の日霞の影は四時やしく小
久よふを那しはりも馬の當う膝さし
出しくんきつた夙情あひしはさす中
めいも末年の七月とてもやうのる今れ
事ちんと待うけの随分夫婦のさうし見
るしとふも何からみもわかるとは強う足
面ろしく扇の骨も要もさしつてさうよ
井のりし細道まてうらけらるるやハ

せしむるはくろくひきり孫ありぬ
のりもそりてぬしひぬふりぬし
毎夜く帰らぬは孫の圖経の字帰ら
けこの圖を孫ては圖を孫のほしぬは持量
てぬ其の月もふらぬたぬのちしぬあり
ふ心得るちかして先このえりてみさる
進しちしやあるをてぬし孫のちし
卧高頃のちしぬもぬしちしぬもぬし

かくる事ちかしくそと存しちし孫の
こたけに去る美しき人の庵へのそたけぬ
るぬしそ神さぬしはきくちやあらぬし
ししにかきいそかきて勢ひ唐しやう天竺へ
やう何もぬるぬるかやぬる月見のおろ
彼瓢のこたけかしくちぬるちぬる田ひ
たすしぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬ
又えちしちしぬるぬるぬるぬるぬるぬる

老人のよきと我年くまといへをわらほして
あつちあはれを恋くおほめぬやと
あきも果るも果し惟然諸君奉加帳の
カハ渡り少衣襟巻十徳海千ト体考らま
を道き出る家神く見え又いふを
んやお少くむ風羅念佛といふを
あつて木魚子似る鳴りものを拵へ則風羅
器し名をくそをよめり

古池ふくかまむむ水のみ

ナムアマタフツナムアマタ

いう勢い支るやあまの檜木は立

雪の帛やなげ紙巾

なんとか振唱歌九ツあま九品蓮其堂

かよふぬは交西あまふて是を唱

うそ米五律六律つ志の廣言古翁

墓乃下よそまいう見まふんや一を

出〜〜し十月十二日草菴へ後所宛例の
一列集〜節かのみ佛を手向〜〜皆白く
所望多〜〜凡そ密〜〜の松林
是斗〜〜の山石屋の無言上人も
あ〜〜合中〜〜交〜〜は〜〜もあ〜〜體
ぬ〜〜まぬ仕合チヨツト〜〜モライ
〜〜書能

お〜〜出〜〜の事〜〜有〜〜在
右邊の細〜〜的あ〜〜の時〜〜人
を似合ぬ見お男のや〜〜人のさ〜〜
折〜〜トナニ是〜〜
た〜〜思〜〜を〜〜
は〜〜の〜〜
付〜〜的〜〜
ち〜〜肥〜〜

判曰コノ茶箋ハ鉢タキヨリ
ヨリタル文勢ナリ

扱是るハ遊丈ハちよつと筆をいせむ。は
湯のかきもやこぬかふま申あしせ孫
去一頃も少ハ能くさし。あまやうは文殊
筆ほしきはぬちふ下おら少孫少お
存斗はまし何書いふさし。あまの玉も
さし取そか少かりてある。能筆もあつとも
はひいさな筆とぬい老くせまやかか

ちよつと事人の見孫くひ方さふ書
し。罪をなすいふさし。其えはあ人
あつはる易せめて草庵一時の笑ひあ
り。おのちもさるさる交し。他見
あし。さるさるさるさるさるさる上
さるさるさるさるさるさるさる
あし。秋のいふさるさるさるさるの草庵
おまをさし。さるさるさるさるさるさる

何ししうしはんをしひしひしはんをしし
 志を至極さしむる軍記發明の上かき
 甲の代小段申多し中をさ述ぬき捨やし然れ
 今世のころき流ハす斗智恵ふく用心さひ
 くて足ふをかやせまふぬくやれよま
 連をさく以上二人よおさし一備しハその
 何しし切ししまうく稗の穂よ馬を少
 何ししんそ何ししかもいひんるる斗

何しししはんをししはんをしし
 孫ふまししし

述懐曰義鑑坊う新田義治よめてはひ
 均能^{ニヒ}産り鍋屋藤四郎よ忠後ウんお
 しかかぬむし海今とそまひん人さく
 おししは人も何ししはものや草の扉
 所路ふう^{ニヒ}苔の袂にちりしひり峰の嵐
 何しし年をさしししあしあ方小たふり免

とく終る花の色はく家といふ因果
名ありおるはまきしら山乃穴後坐す
織部の方丈れをいひも頼むるし
文もい等しくいひおあさく一字つ切て
旗の紋おちしひちさくむむむむ
めいめいめいめいめいめいめいめい
指かきくわが家人のいひひひひひひ
ゆふ又なる入るいひひひひひひひひ

あなうらあ何そのまといひひひひひひひ
つめきり端聴せよ〜

判断曰凡花おちて月にはあふ〜
かましせのるるるるるるるるるるる
いひひひ其のいひひひひひひひひひ
えあはれ白情いひひひ自れいあ〜あはれ
侍も誇りあはれいひひひあはれあはれ
牡丹うんとはを引あはれいひひひひひひ

感していよひのち坊主の板之し
やうく程むし油つ皿中五枚をまけの
有うせしや草ふいしぬやうぬ

十二月のあ半

大首

潘川柳

琵琶園社中撰集書目

尾張名古屋
東壁書房 永樂屋東四郎

雀芝集

此書を朱樹翁東方紀行の集りて詩園とて刊板せし
いとふあつめより全部五冊とす

春鶯囀

全一冊 梅藏人

天光著

全一冊

法之華経

全一冊 三日月集

白圖撰
少汝補

全一冊

麻苧

全一冊 秋風餘情

椿堂撰

全一冊

鳶乃眼

全一冊 人来鳥

青川撰

全一冊

むし合

全一冊 玉垣集

孔阜撰

全一冊

續赫夜姫

全一冊 草枕

素磔撰

全一冊

瓢日記

全一冊 松の炭

蕉雨撰

全一冊

橋日記 卓池撰

全一冊 庵の犬

野雀
五道
大藤

同輯 全三冊

とろろ衣 也有老人述
狂文狂言多しとあり 全三冊

同後編 同上

全三冊

狂歌蓬々嶋 三蔵樓大人撰
春興狂詠

全三冊

狂歌願の絲 同上
七夕の狂歌踏入

全一冊

狂歌初日集 同右
狂詠南刀合の
高志をとり 全二冊

狂歌千歳集 同上
同右
狂詠をとり 全二冊

狂歌初心抄一冊 唐衣橋河大人著
詠文のゆるぎ多き
多きをあつむ

狂歌才蔵集 四季とよみ
詠君の言を
あつむ 全二冊

俳諧歳時記 著作堂先生撰
全部二冊

此書ハ四季洞寄彩撰増注神事佛會
古事古歌のあつむく裁多し甚洋

同夏たより 也有翁著 全一冊

同諸集訂誤 布碩翁著 全一冊

志みのすろ物語 宿屋飯盛大人著
全部二冊出来 此書ハ當世に
傳流りうり多て尤無あると云

其文體ハ字活拾遺物語の體文より
後入と云
拙学俳文拾遺文に
そとけよん甚お
ろよきなり

